

氏 名	鎌 田 佐 兵 衛 かま だ さ へ え
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	論 医 博 第320号
学位授与の日付	昭 和 41 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	末梢リンパ内細胞知見補遺

論文調査委員 (主 査) 教 授 堀井五十雄 教 授 西村秀雄 教 授 岡本道雄

論 文 内 容 の 要 旨

リンパ内細胞を記載し相互比較を試みる場合、リンパ採取の部位、源泉部位について適確に把握することは絶対に必要で、これなくしてなされた相互比較は全く無意味である。

著者は体重 2～3 kg の白色カイウサギについて、末梢リンパを 1) 第一次節前リンパ、2) 第一次節後リンパ、3) 第二次節前リンパ、4) 第二次節後リンパなどに分ち、その検索の結果を吟味、比較検討した。

1) 第一次節前リンパはリンパ節を全く経由しないリンパであるが、これをつぎの2種に分けて考えなければならない。

a) 源泉領域にみるべきリンパ組織(リンパ小節、リンパ浸潤)のないもので、このリンパの特徴として、イ) 細胞数の少ないこと、1 cm² 中1000以下、ロ) 単球が比較的多いこと、20～30%、ハ) リンパ芽球を全く含まないなどがあげられる。

b) 源泉領域にリンパ節以外のリンパ組織の発達しているもので、かかるリンパの特徴として イ) 細胞数の多いこと 1 cm² 中3000から数万、ロ) 単球の比較的少ないこと、10%以下、ハ) リンパ芽球の出現することなどがあげられる。

2) 第一次節後リンパは細胞数の点では経由したリンパ節によってその数にかなりの変動はあるが、それとて第一次節前リンパの 1 cm² 中0から数万に及ぶバラツキに較べると安定したものであるが、細胞種については全く安定した劃一性を示すものである。第一次節後リンパの特徴としては、イ) 細胞数の多いこと、1 cm² 中7,000から数万、ロ) リンパ球系細胞の多いこと99.0～100%、ハ) 単球の少ないこと、0～1.0%、ニ) リンパ芽球の出現、1～5%などがあげられる。

3) 第二次節後リンパ

大体において第一次節後リンパの性格に近い。ただしリンパ節2個を通過しても必ずしも細胞数はまさない。リンパ芽球をますとは限らず、単球%の減少することもない。すなわち第一次節後リンパ以後はリ

リンパ内細胞の性格からみた場合、大きな変動はないものと言える。

以上の点からみて、末梢リンパについて、その細胞の相互比較（同種または異種間、いずれも）を試みる場合、安定性の高い第一次節後リンパを代表として選択することが適切かつ必要である。

論文審査の結果の要旨

血液内細胞とちがってリンパ内細胞はその採取部位によって細胞数および細胞組成に大差があることが知られているが、これらの同一体内における千差万別のリンパのなかに細胞組成の点について何か一定の基準がないかと言うことを著者は系統的に吟味してみた。

カイウサギについて、全身各所の末梢リンパをリンパ節経由の有無、経由したばあいには経由リンパ節の数によって、第一次節前リンパ、第一次節後リンパ、第二次節前リンパ、第二次節後リンパなどに分類してその細胞数および細胞組成などを系統的に調べて相互比較を試みたところ、採取部位は互に異なっても、これらの分類によって規制せられる、他のグループごとに相互比較しうべきそれぞれのグループに共通の性格があることがわかった。

すなわち第一次節前リンパは部位的相違のもっとも大きい変異にとむリンパ群であるが、少なくとも2種に大別せられる。

第一種はその源泉領域にみるべきリンパ浸潤などのないものであり、細胞数は1 cmm 1,000以下、単球が比較的多く20～30%を占めること、リンパ芽球を全く含まないなどの共通の性質を示す。第二種に属するものは源泉領域にリンパ小節やリンパ浸潤の発達しているものであり、細胞数は多く1 cmm 中数千から数万におよび、単球は10%以下でリンパ球の純度たかく、リンパ芽球が必ず多少とも出現すると言う共通の特質をもっている。

第一次節後リンパは比較的安定したリンパであり、細胞数は1 cmm 中7,000から数万、リンパ球は99～100%で単球は殆んどなく、リンパ芽球は必ず出現するなどの共通の性質を示す。

これ以後の第二次リンパはその性質に大きな変動を示さず、第一次節後リンパの特質に代表される性格を共通性格としてもっている。このような観点から第一次節後リンパは末梢リンパとして最も安定したものであり、末梢リンパの代表者とも言えるもので、諸種の比較研究のばあいにも採取容易な第一次節後リンパを用いることが最も適当であると言える。

本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。